

# 発 明 文 化 論

〈第 99 回〉

丸山 亮

## 建 築 の 継 承

五輪をにらんだ新国立競技場の設計は、公募によりいったんザハ・ハディド氏の案に決まりながら、工費や工期の問題から取り消しとなり、再募集が行われた。その結果、日本の2チームが応募して、建築家の隈研吾氏等による案が選ばれている。もう一方の、建築家、伊東豊雄氏等による案も全体の外観では似たところがあり、両案は激しく競り合ったと伝えられる。初案の選定が密室で行われたという批判もあって、再度の公募は審査基準と評価が公表され、それだけ透明性が高まったといえよう。軒を支える柱を強調し、3層の各層に植生を取り込んで日本的な情感に訴える隈氏等の案と、同じく建物を取り巻く列柱が目を引き、屋根に赤色を配してモダンな伊東氏らの案は、いずれも美的な快感を呼ぶ。したがって、どちらが選ばれても不思議はないように思われる。

隈氏等の案が採用と決定されたとき、隈氏は各階の腕木が法隆寺を意識したものだと言っていた。隈氏といえば、先の新歌舞伎座の設計でも、建て替え前の歌舞伎座の、左右対称の大屋根と入り口の外観をそのまま引き写して近代的な高層ビルに組み込んだ手腕が注目された。ここでは記憶を受け継ぎ再生することが課題だったというが、その方針は新国立競技場の設計でも変わらない。

記憶の保存と継承は、隈氏に限らず建築の基本原則とっていいだろう。ルネサンス時代の建築家パルディオは、ローマ時代の古典的な様式を数千年の後に蘇らせた。その影響はさらに後世になってホワイトハウスの外観にまで及んでいる。また、日本には伊勢神宮の造営に代表される式年遷宮という伝統がある。一定の年限を定めて社殿をそっくり同じに造り替えるもので、ここには徹底した継承の思想がある。

隈氏が依拠したと言っている法隆寺の建築にしても、日本の世界遺産ではあるが、よく知られているように、外来様式を取り込んでいる。ギリシャ神殿のエンタシスの列柱を起源とする中部から上部へと細くなっていく柱があり、木組みの格子状天井などは汎アジア的な意識の結晶とみることができる。法隆寺はシルクロードの東西に偏在する価値観を継承しており、隈氏等による新国立の設計案は、さらにそれらを意識したものともいえようか。

ところで新国立の設計案は、日本で開かれる五輪の施設としての、さらにこれが建つ場所の意味を表現することも求められる。いわば、らしさが現れていなくてはならない。軒を見上げた時の木の格子は日本建築の美の基本とされているので、これを踏襲し、開催国の心意気を示す。さらに神宮外苑の静寂な環境とは、緑化の植生をベランダに持ち込むことで、なじませる。

ザハディ氏の初案が撤回されるまでのごたごたは記憶に新しいが、再度の公募で決まった隈氏らの案に、今度はザハディ氏の側がクレームを付けた。「デザインはわれわれが2年かけて提案したスタジアムのレイアウトや座席の構造と驚くほど似ている」というのがその言い分で、隈氏らに敗れた伊東氏も、表層部分は違うが、中身はハディド氏案にかなり近いと批判的だ。これには案を募った日本スポーツ振興センターが著作権の譲渡をハディド氏側に求めているようで、隈氏らの案がハディド氏のデザインを一部借用しているのは事実なのだろう。

建築の原理が記憶の継承にある以上、先行例とのある程度の類似は避けられない。ただ、案の募集に先立って、建築の著作権の扱いをもっと明確にしておく必要があったと思われる。いずれにしても、せつかく決まった案がこれ以上ごたごたを重ねることなく、実現するように望みたい。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)